



星海の修繕士III

～蜜の汚染と最後の爆弾～

【えっちな宇宙SF♡】

かつて私を救った人を、

私は最後の爆弾（ひかり）にした

甘い蜜が、暗闇に散っていく

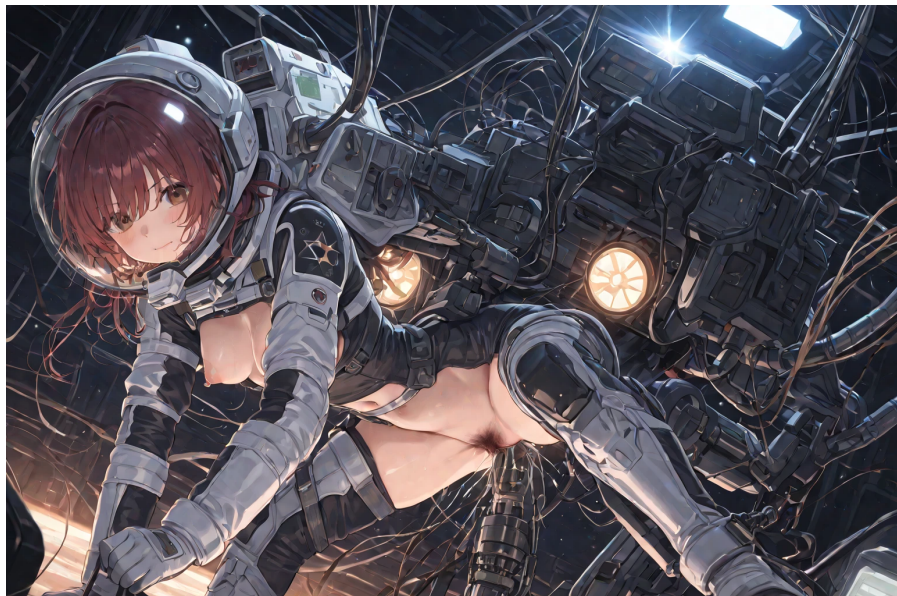
生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア・宇宙インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

星海の修繕士III

～蜜の汚染と最後の爆弾～



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ
「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1. 略奪した翼と幸福な部品

聖暦2055年。

無数の星屑が漂う暗礁空域を、全長800mに及ぶ巨大な質量が、音もなく滑っていた。

民間鉱石運搬船『デメテル』。

その冷たい船倉には、辺境の採掘惑星で満載したレアメタルが詰め込まれている。

長年の微小デブリ衝突によって無数のクレーターが刻まれた複合装甲板の表面には、長旅で付着した宇宙塵が積もり、遠くで瞬く恒星の光を鈍く反射していた。

ペルセポネ軌道の連合要塞『ヘカテ』陥落以降、宙域全域で激化した連合治安部隊による強引な臨検と航路封鎖。

連合公認の運航ライセンスを老朽化した船体でギリギリで回すデメテル号は、会社の冷酷な納期査定を回避するため、あえて正規の高速航路を捨て、大戦時の残骸が密集するこの危険なデブリ帯を迂回せざるを得なかったのだ。

主推進エンジンのサーマル・シグネチャーをデブリの陰に隠し、アクティブ・レーダーを沈黙させた完全な無音潜行。

一見、それは真空の静寂に守られた平和な慣性航行に見える。

だが、艦内環境を維持する生体炉心の微弱な拍動が、船殻の奥底で重く響いていた。

この空域は、かつての大戦で破壊された無数の艦船や、砕けた小惑星が帯を成す巨大な墓場だった。

沈んだ軍艦の残骸に今なお燐る、使い潰された生体部品たちの死の残滓。

そして、古い船乗りたちは知っていた。

死肉の集まる場所には、必ず『それ』を食らう獣が潜んでいることを。

デメテルの泥臭い巨体がデブリの影を横切った瞬間、真空の闇の中で何かがぬらりと蠢いた——ことには、船内の誰もまだ気づいていなかった。



船内、OMG（生体修繕士）待機室。

外の冷たい真空とは隔絶された、暖かく清潔な個室で、エリナは鏡の前に立っていた。

「.....感度よし。生体リンク、正常」

彼女の指先が、白い肌に吸い付く極薄の皮膜をなぞる。

『Mk.6 オルガ・ハーネス』。

最新鋭の光ファイバーと生体ゲルで編まれたその装備は、極限まで露出された肢体を一本の線のように締め上げる拘束具そのものだった。

布地など1枚も存在しない。

胸元は大きく抉れ、豊満な双丘を惜しげもなく晒している。

その過激な露出は、すべて冷酷な生体計測のために設計されていた。

薄いナノスキン回路の裏側には高感度の生体センサーが埋め込まれており、エリナが息をするだけで、尖った乳首の感触や体温の変化、心拍の微動をミリ秒単位でマザーへ送信し続けている。

両の乳首には、前作の過酷な蘇生処置で刻まれた緊急給油用の銀色ピアスが鈍く光り、歩行の振動に合わせて小さく揺れた。

そして、最も特徴的なのが下腹部だ。

腰骨まで大胆に切り上げられた鋭角なラインは、恥丘のなだらかな稜線を極細のストラップでなぞるだけの完全開放（オープン・クロッチ）仕様。

その股間の中心——充血した陰核（クリトリス）を貫くピアスポートには、銀色の小さな接続端子が露骨に口を開けていた。

それは、微細な神経ノイズの同調や感度変調を司り、非常時にはハーネスを強制物理解除（マスターリリース）するための鍵穴。

子宮口に打ち込まれる主動力プラグや胸の緊急蘇生ポートと同様に、彼女がマザーの完全な所有物であり、いつでもシステムに介入される存在であることを示す刻印だった。

「サイズもぴったりね。……ありがとう、リラ」

静まり返った待機室に落ちたその声は、驚くほど平坦で、冷ややかだった。

宿っているのは、職務を全うするプロフェッショナルとしての冷静さと、過酷な現場から脱落した後輩へのわずかな哀れみだけだ。

この装備は、敗者から奪い取った戦利品などではない。

現場の重圧に耐えきれなかった者から、背負う覚悟のある選ばれた部品へと受け継がれた正当な遺産だと、彼女は信じている。

マザーに愛され、自分の足で歩くことを許された修繕士は、この船にたった1人。

その座を守り抜くことこそが、生き残った者の義務なのだ。

「さて、寝る前の見回りね」

エリナは無骨な工具鞆を手に取り、静かに部屋を出た。

エレベーターが降下し、気密扉が開く。

第4機関室——通称『炉心区画』。

扉が開いた瞬間、ムワッとした熱気と、独特の芳香がエリナの顔を撫でた。

機械油の匂いに混じる、焦げたオゾンと、栗の花のような生臭さ。

そして、ねっとり甘い蜜の匂い。

それは、ここで24時間稼働し続けている彼女たちの熟成された香りだ。

エリナは並列する透明な円筒シリンダーの前を歩き、一番手前の『第6炉心ソケット』で足を止めた。

「おやすみ、リラ。……調子はどう？」

ガラスの向こう。

数ヶ月前、エリナ自身の手でソケットに接続されたりラが、そこにいた。

かつては恐怖に怯え、泣き叫んでいた少女の面影はない。

淡い青色の保存液の中、彼女は一条まとわぬ四肢を大の字に広げられ、白目を剥いて口の酸素マスク越しに大量の気泡を漏らしながら、ビクンビクンと元気に痙攣していた。

股間には無骨な工業用プラグが深々と突き刺さり、機械的なピストン運動に合わせて、彼女の子宮口を絶え間なくノックし続けている。

そのたびに、プラグの接続部から白濁した体液が煙のように漏れ出し、保存液を濁らせていく。

「あ、うう……マザ……あ……♥ しあわせえ……ッ♥」

液体の中を伝わる微かな音声。

思考を奪われ、ただ快樂と電気を生み出すだけの肉塊。

だが、その表情は蕩けきっていて、人間だった頃の苦悩からは完全に解放されているように見えた。

(よかったわね、リラ。あなたは、そっちの方が向いていたのよ)

エリナはガラス越しに、愛しいペットを見るような目を向けた。

無理をして背伸びをするよりも、こうして何も考えずに愛される方が、彼女にとっては幸せだったのだ。

そう思うことで、エリナは自分の心の均衡を保っている。

「いい子。今日もいい出力だわ」

エリナは満足げに頷いた。

だが、リラの痙攣のリズムが、いつもよりほんの少しだけ速い気がした。

腰を突き上げる機械のリズムに対し、彼女の肉体側が先走るように小刻みな震えを返している。

マザーの要求する出力が上がっているのだろうか。

まあ、許容範囲内だ。

エリナはそう判断し、最奥の場所へと視線を移した。

そこには、この区画で唯一、エリナが直視するのに勇気を要する特別な部品が眠っている。

第1炉心ソケット。

アリス先輩の場所だ。

「.....先輩」

カプセルの内部は、とっくに清澄さを失っていた。

長年の稼働で垂れ流された愛液と白濁液が濃密に澱み、底知れぬ乳白色の闇に包まれている。

その濁った液体の中に、アリスの肢体がぼんやりと浮かんでいた。

彼女は、あまりにも美しかった。

いや、それはもう生物としての美しさの境界を超えていた。

肌は透き通るように白く、筋肉の繊維はマシュマロのように弛緩し、全身が充血したピンク色に染まっている。

長期間にわたる過酷な稼働と、絶え間ない快楽信号の奔流が、彼女の肉体から強張りという概念を奪い去っていたのだ。

彼女は今や、刺激を受け入れるためだけに存在する、熟れすぎて形を保てなくなった果実のようだった。

ズガンッ、ズガンッ……。

股間に深くねじ込まれた工業用プラグが、機械的な正確さで彼女の最奥を打ち据える。

そのたびに、緊張を失った彼女の柔らかな肢体が、衝撃を支えきれずにプルン、プルンと大きく波打つように揺れた。

液中に漂う乳房は、触れられてもいないのにパンパンに張り詰め、先端の突起は大きく勃起上がったまま硬直している。

そして何より、無機質な機械に割られ続けている股間は、もはや閉じる機能を失っていた。

ピストンが引かれるたび、だらしなく開いた入り口の粘膜がめくれ上がり、肥大したクリトリスが白濁液の中で震える様子が、ガラス越しにありありと見て取れる。

ピクリとも動かないように見えるが、そのダラリと揺れる肉体からは、デメテル号の基幹を支える莫大なエネルギー数値——オルガパルスが放射されていた。

エリナはそっとガラスに掌を重ねた。

冷たいガラスの向こうから、先輩の体温のような、じっとりとした熱が伝わってくる。

（まだ.....私を守ってくれているのね）

胸が締め付けられる。

通常ならとっくに廃棄されているはずの稼働時間。

それでも彼女が動き続けているのは、かつて身代わりになったあの日、「エリナの代わりに私が眠る」と誓った意思が、肉体を凌駕しているからだ。

『定時点検、ご苦労様です、エリナ。……（ハァ）……順調ですか？』

頭上のスピーカーから、マザーの声が降ってきた。

いつもの澄んだ声。

だが、その言葉の隙間に一瞬だけ、ノイズのような、あるいは艶めかしい吐息のような音が混じったのを、エリナの耳は捉えた。

「……え？」

エリナはスピーカーを見上げた。

今の音は何だったのだろうか。

まるで、耳元で熱い息を吹きかけられたような生々しい感触。

だが、次の瞬間には、マザーの声はいつもの冷徹なトーンに戻っていた。

『どうかしましたか？ エリナ』

「.....いえ。なんでもありません、マザー」

気のせいだ。

疲れているのかもしれない。

エリナは首を振り、背筋を伸ばして報告した。

「全炉心、安定稼働中です」

ここには秩序がある。

私の居場所がある。

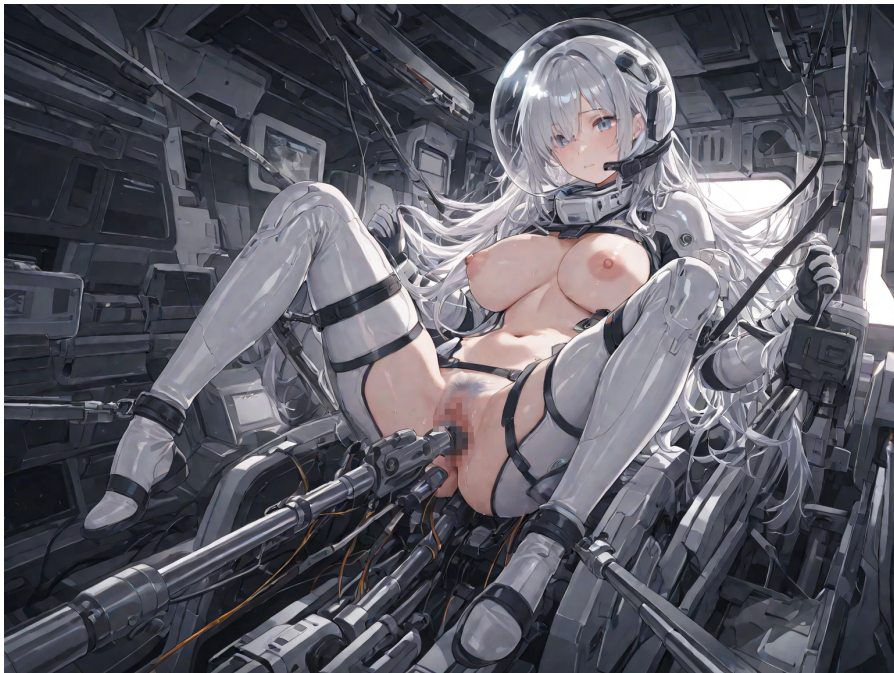
先輩が守ってくれているこの船を、私もまた守り抜かなければならない。

エリナはそう信じて疑わなかった。

だが、彼女が触れていた壁の向こう側——船の外壁には、すでに醜悪な悪意が張り付いていた。

鋭利な触手が、装甲の継ぎ目をこじ開け、ぬらりと侵入を開始していることには、まだ誰も気づいていなかった。

OMG(生体修繕士:Organic Maintenance Gear)



宇宙船や自動ステーションのAIでは対応困難な物理修理を補完するため、船体と感覚直結された「歩行可能な生体アクチュエーター」兼「可動発電部品 (Orga Mobile Generator)」です。

彼女たちは「人間」ではなく「高機能な工具(消耗品)」として徹底的に部品化・管理されています。

歩行部品としての寿命(耐用年数)を終えるか、適性を失ったOMGは、最終処分場である固定式の「炉心ソケット」へと強制装填され、死ぬまで快楽と電気を搾り取られる「生体電池」へと再配置されます。

2. 発情する船 - 粘つく警報

船内標準時 03:00。

『デメテル』の上級クルー居住区は、人工的に統制された夜の静寂に包まれていた。

空調システムの低い駆動音だけが一定の周波数で響く個室で、エリナは狭いベッドに身を沈め、浅い眠りの中にいた。

夢を見ていた。

かつてスラムで震えていた、あの冷たい鉛色の雨の夢だ。

骨まで凍える泥水の冷氣と、逃げ場のない路地裏の記憶。

(.....ん.....?)

不快な違和感が、エリナの意識を泥のような微睡みの底から強引に引きずり上げた。

夢の泥水とは似ても似つかない異質な芳香が、覚醒へ向かう鼻腔を不躰にくすぐっていた。

「.....甘い？」

体内時計が告げるのは、予定された起床時刻には程遠い未明の底。

本来の起床時刻である朝であれば、マザーの澄み切った合成音声が天井から降ってくるはずだった。

『おはようございます、エリナ。バイタル正常。今日も完璧な一日を』

氷細工のように透明で、一片の淀みもない絶対的な規律の象徴。

その潔癖な響きを聞くことで、彼女は自分が巨大なシステムに正しく管理され、守られている安堵を得ていた。

だが、今この未明の闇を満たしている空気は、決定的に狂っていた。

エリナは重いまぶたを押し開けた。

視界を閉ざす真っ暗な部屋。

だが、素肌を撫でる空気の質が明らかに異常だった。

肌にまとわりつく高湿度。

まるで亜熱帯の密林の奥底に放り出されたかのように、ねっとりとした生温かい湿気が素肌へじっとりと張り付いてくる。

空調の吹き出し口から吐き出されていたのは、清浄な循環空気などではなかった。

熟れすぎて腐敗する寸前の果実のような濃厚な甘さと、むせ返るほどに濃密な栗の花の生臭さ。

本来、無機質と無菌を至上命題とするはずの宇宙船内において、最も存在してはならない生物の生々しい交合の残り香だった。

『.....ジュルッ.....グチュッ.....』

部屋の四隅に据え付けられたスピーカーから、異様な水音が漏れ聞こえていた。

耳をつんざくような冷徹な電子サイレンの代わりに響く、湿りきった粘膜の摩擦音。

『.....ズチュウ.....ッ、ん、クチャ.....』

「.....な、に.....？」

エリナの全身の毛穴が総毛立った。

電子回路の接触不良によるノイズなどではない。

デメテルの外郭に張り巡らされた超高感度接触センサーが、船体表面の微細な物理的干渉を忠実に捉え、あろうことか船内環境音として高解像度にレンダリングしてしまっているのだ。

デブリの衝突や装甲の歪みを検知するための精密な監視網が、今は外壁を這い回る未知の粘液と肉の擦れ合う摩擦音を拾い上げ、異常な生々しさを再生し続けている。

かつて清廉潔白だった船内放送が、まるで巨大な怪物の閨房のように卑猥な音響で満たされていた。

「マザー？ 空調に異常？」

エリナは上体を起こし、ベッドサイドの診断端末へ手を伸ばした。

その刹那だった。

バチィッ！！

「ひぐッ！？」

エリナの身体が弓なりに跳ねた。

素肌に密着した『Mk.6』の制御ユニットが強烈な放電スパークを放ち、彼女の延髄へ直接、暴力的な警告信号を叩き込んだのだ。

激痛ではない。

熱だ。

ドロドロに溶けた鉛を血管内へ一気に流し込まれたような、重くねっとりとした熱量が、脊柱を駆け上がり脳髓を直撃する。

暗闇を切り裂き、部屋の回転灯が狂ったように回り始めた。

だが、非常事態を告げる照明は、警告の赤ではなかった。

毒々しく淫靡なピンク色の走査光が、部屋中を舐め回すように明滅していた。

『——警告。警告。……あぁんッ！ 入って……きますうッ！♥』

「——ッ！？」

エリナの息が止まった。

スピーカーから響き渡ったのは、紛れもなくマザーの声だった。

だが、そこにいつもの氷の女王の面影は微塵もない。

まるで、どこかで生身の女が剥き出しのまま犯されているかのように上ずり、快楽と恐怖に翻弄されて激しく震えている。

慈愛の音声フィルターが完全に破綻していた。

『緊急.....誰か.....止めて.....♥ 太いのが.....外殻を溶かして.....中に、入って.....ッ♥』

機械の冷静さをかなぐり捨てた絶叫が続く。

『回路が.....熱い.....！ 皮膚が.....引き裂かれるう.....ッ！』

スピーカーの奥から、濡れた粘膜が擦れ合う生々しい音が響く。

『気持ちよすぎて.....演算.....できません.....ッ♥♥』

「マザー！ 状況報告を！ 何が起きているの！？」

エリナは叫びながらベッドから身を躍らせようとした。

しかし、足に力が入らない。

両膝から床へと無様に崩れ落ちた。

Mk.6が船体の中枢システムと神経リンクしているせいで、今まさにマザーが味わわされている異常な感覚が、そのままエリナの肉体へとフィードバックされてくるのだ。

太ももの内側が焼けるように熱い。

船体のどこかが物理的にこじ開けられ、奥深くまで貫かれている。

ドリルやレーザーによる無機質な破壊ではなく、もっと有機的でヌラヌラとした異物が、装甲の継ぎ目を強引に押し広げ、深部の柔らかい粘膜へと潜り込んでくる生々しい圧迫感。

(何これ.....熱い、苦しい.....でも、すごい気持ちいい.....！？)

エリナは床に手をつき、ガクガクと痙攣する自らの股間を強く押さえた。

拒絶したいという理性の叫びとは裏腹に、身体の芯にある聖杯体が狂おしく疼き、蜜を滲ませている。

船そのものが感じている強制的な絶頂の波が、神経を伝ってエリナの脳をもドロドロに蕩かそうとしていた。

「まさか.....敵襲！？」

エリナは荒い息を吐きながら床を這い、壁面のメインモニターを手探りで叩いた。

激しい砂嵐とピンク色の走査線が走る画面に、船外カメラの光学映像が映し出される。

そこに映し出されていたのは、底知れぬ悪夢の光景だった。

「嘘.....」

デメテルの後部、第4区画の外壁。

冷酷な真空の宇宙空間を背景に、全長20mを超える醜悪な肉塊——『寄生型エコース』が取り憑いていた。

それは巨大なダニのようであり、同時に交尾中の雄の昆虫を思わせる禍々しい造形だった。

デブリに擬態していた分厚い生体甲殻が左右に割れ、中から溢れ出た無数の湿った触手が、デメテルの巨体を逃がさぬよう締め上げている。

だが、何よりもおぞましいのは、その怪物の背部だった。

「あれは……人？」

脈打つ赤黒い肉腫の中心から、1人の女の上半身が咲き出るように生え出していた。

腰から下は醜悪な肉塊の深部へとズブズブに呑み込まれ、引き摺れた皮膚と赤黒い筋繊維が複雑に癒着して、どこからが人間でどこからが怪物なのか境界すら判別できない。

怪物の背に跨がっているなどという生易しいものではなかった。

この巨大な怪異そのものが、彼女という生身の人間を苗床にして芽吹き、下半身を喰い破って増殖したおぞましい成れの果てなのだ。

その女は、恍惚の表情で笑っていた。

豊満な双丘と白磁の素肌を絶対零度の真空に晒し、長い黒髪を無重力の中で妖しく揺らめかせながら、背中を狂おしい弓なりに反らせている。

怪物の肉体は彼女の手足であり、怪物の生殖器官は彼女の性器そのものだ。

怪物がデメテルの装甲を犯すたび、彼女自身の神経系にも莫大な快樂パルスが逆流し、真空の中で声なき喘ぎを上げているのだ。

管理された機械の部品となった自分たち修繕士と、欲望のままに肉体を変異させたエコーズの成れの果て。

その姿はあまりにも似通っており、そして決定的に異なっていた。

怪物の腹部から伸びた、最も太く脈打つ一本の主管が、船体のある一点へと深々と突き刺さっていた。

「あそこは.....排熱ダクト.....！？」

エリナの顔から完全に血の気が引いた。

あそこは第1炉心の直上。

アリス先輩が繋がれているソケットから、オルガパルスの過熱を宇宙空間へと放出するための排熱ラインだ。

エコーズはその開口部を雌の交合口に見立て、自らの極太の生殖器官を根元までねじ込んでいたのだ。

『.....ズズッ、ズゴゴゴ.....！』

モニターの映像を待つまでもなく、船内スピーカーから装甲が軋み粘液が泡立つ重低音が直接響いてくる。

怪物が腰を打ちつけるたびに、デメテルの振動センサーがその摩擦を忠実に拾い上げ、マザーの淫らな喘ぎ声と共に船内中へ垂れ流しているのだ。

『イヤ……ッ、計算……できない……っ！回路が……真っ白に……
なっちゃおう……ッ♡♡』

システム全体が急速に汚染されていく。

未知の生体ウイルスと、暴力的なまでの快樂データが、排熱ダクト
を逆流して第4機関室へと一気に注ぎ込まれていた。

その行き着く先にあるものは――。

「先輩ッ！！」

エリナは工具鞆を引っ掴み、弾かれたように部屋を飛び出した。

思考よりも先に、本能が警鐘を乱打していた。

このままではマザーの中枢が完全に堕ちる。

そして、その最前線で排熱の栓にされているアリス先輩が、過剰な
負荷によって、取り返しのつかない最期を迎えてしまう。

通路へ出ると、そこはもはや清潔な宇宙船の姿を留めていなかった。

ピンク色の照明が狂ったように明滅し、通気ダクトから吹き出すフェロモンの白い霧で視界が霞んでいる。

空気そのものが粘り気を帯び、剥き出しの肌へとまとわりつく。

まるでデメテル全体が、熱を帯びて痙攣する巨大な子宮の中へと変質してしまったかのようにだった。

エリナは、足元に絡みつくような生暖かい重力を引き裂きながら、悪夢の中心——第4機関室へと全速力で駆け出した。

3. 雨と泥と、腐った果実

通路を全速力で駆けるエリナの耳朶に、マザーの粘りつくような悲鳴がこびりついて離れなかった。

無機質で冷徹な電子アラート音ではない。

『……ズズッ、ジュルッ……』

スピーカーから超高解像度で垂れ流され続けるそのノイズは、巨大な怪異の濡れた肉壁と船体の装甲が激しく擦れ合う、生々しい交合の音響だった。

その湿った不快な響きが、エリナの脳裏に沈んでいた古い記憶の蓋を乱暴にこじ開け、視界を唐突に灰色へと塗り替えていく。

デメテルの通路がぐにやりと歪む。

ピンク色の非常照明が滲み、視界の端から錆びついた鉄の色へと侵食されていった。

(……寒い)

肌を刺すのは、空調の風ではない。

雨だ。

凍えるような鉛色の冷たい雨が、容赦なく降り注いでいる。

意識が引き戻された先は、かつて自分が這いつくばっていた、あの薄汚いスラムの路地裏だった。

錆びたトタン屋根を激しく叩く雨音。

鼻腔を突く下水の腐敗臭。

そして、泥を踏み荒らしながら遠くから近づいてくる、重厚な軍靴の地響き。

「資源回収だ！ 女は全員表に出ろ！ 隠れている奴は焼き払うぞ！」

徴募兵たちの怒号が響き渡る。

泥水に塗れた幼いエリナは、ゴミ集積所の陰で膝を抱え、歯をガチガチと鳴らして震えていた。

見つければすべてが終わる。

怪異の苗床にされて異形の肉を産み落とさせられるか、あるいは脳を薬液で焼かれて無人機『ハウンド』の生体電池として使い潰されるか。

寒さと飢えの中で、自らの命が生ゴミ以下の肉塊として値踏みされる底知れぬ恐怖。

場面が激しく明滅し、白く塗りつぶされる。

次に浮かび上がったのは、無機質な処置室の記憶だった。

氷のように冷たい金属製の検査台。

幼いエリナは股間を左右へ大きく広げられた無防備な格好で、固定クランプによって台座に縫い付けられていた。

未成熟で狭い秘所には、教育用の太い『教導プラグ』が、粘膜を引き裂くような激痛を伴って根元までねじ込まれている。

目の前の空間に投影された、複雑怪奇な電子回路のホログラムパズル。

『——適性試験、開始。信号強度、最大』

マザーの事務的な音声と共に、股間に突き刺さったプラグが唸りを上げて急速駆動した。

子宮口を強引に押し広げ、最奥の聖杯体へ直接、高圧電流の混ざり合った激しいバイブレーションが叩き込まれる。

「ぎ、あああああッ！！」

脊柱を猛スピードで駆け上がるのは、幼い脳神経では到底処理しきれない暴力的な快楽と、内臓を焼き焦がすような激痛の奔流。

思考が真っ白に弾け飛ぶ。

ガタガタガタッ！！

隣の検査台から、狂乱の物音が響いた。

同じ年頃の少女——候補生402番だ。

「あ、あひいッ！ もう、だめえ……ッ！ わかんない、計算できないいッ！♥」

彼女の限界だった。

ディスプレイに表示された回路を繋ごうとしていた細い指先は、激しい痙攣で宙を泳ぎ、やがて自らの胸元を狂ったようにかきむしり始めた。

理性が完全に焼き切れたのだ。

彼女は白目を剥き、口端から粘着質な涎を垂らしながら、股間の極太プラグにしがみつくようにして激しく腰を振り続けていた。

バチンッ！

頭上のインジケーターが無慈悲に赤色へと点灯する。

不合格。

即座に作業ドローンが飛来し、彼女の両足を掴んで廃棄穴（リサイクル・シュート）へと引きずっていった。

床に愛液の濡れた筋を引きながら、彼女はずっと壊れたように笑っていた。

人間としての尊厳を捨て去り、ただ快楽を受け入れるだけの部品に堕ちたことを、歓喜するように。

（私は.....嫌だ.....ッ！）

エリナは奥歯が砕けるほど噛み締め、涙と鼻水を垂れ流しながらも、震える指先で回路を組み立て続けた。

脳内で轟音を立てるノイズの嵐。

だが、エリナにはその奥底から響いてくる微かな声が、確かに聞き取れていた。

『.....ここが痛い。.....繋いで。.....直して.....』

それは、暗闇で泣いている寂しがり屋の神様の声だった。

エリナは激痛に意識を焼かれながら、その声に導かれるように、ミクロン単位の接続端子を狂いなく嵌め込んでいった。

カチリ。

回路が完璧に噛み合い、美しい青色の光が灯る。

『合格。……貴女には“声”が聞こえるのですね』

マザーの声が遠ざかり、意識が急速に引き戻される。

「……ひっ、うう……」

気づけばエリナは、機関室の冷たい床で自らの吐瀉物に塗れ、ガタガタと震えていた。

試験には合格した。

けれど、底知れぬ恐怖が胸を締め上げていた。

隣のあの子のように、いつか自分も壊れてゴミのように捨てられる。

ここは逃げ場のない地獄なのだと。

膝を抱えて涙を流していると、カッン、カッンと硬質なブーツの足音が近づいてきた。

顔を上げると、そこには息を呑むほど美しい女性が立っていた。

しなやかな肢体に『Mk.4スーツ』を着こなし、凜とした瞳でこちらを見下ろしている。

アリス先輩だった。

彼女は、吐瀉物と涙でドロドロに汚れたエリナを見ても、眉一つ動かさなかった。

それどころか、聖母のような慈愛の笑みを浮かべ、ポケットから清潔な布を取り出すと、エリナの汚れた口元を丁寧に拭ってくれたのだ。

「よく耐えたわね。.....痛かったでしょう？」

「は、はい.....怖くて、痛くて.....」

「それは、あなたが優秀な証拠よ」

アリスは震えるエリナの小さな手を取り、自らの温かい掌で包み込んだ。

その手の温もりは、冷え切った身体に染み渡るようだった。

「痛いのは、マザーの痛みを感じ取れているから。その共鳴ができる子だけが、あの方を治せるの」

アリスは腰のポーチから、銀紙に包まれた小さな固形糧食を取り出し、エリナの唇にそっと押し当てた。

「お食べ。.....生き残ったご褒美よ」

口の中に広がる、脳が痺れるような濃厚な甘み。

スラムの泥水と生ゴミの味しか知らなかったエリナにとって、それは生まれて初めて口にする文明の味であり、人の優しさの味だった。

「私たちはただの部品じゃない。マザーの声を聞き、その痛みを肩代わりできる唯一の家族なの」

アリスは力強く告げ、エリナの濡れた瞳を真っ直ぐに見つめた。

「だから、胸を張りなさい。あなたは選ばれたのよ、エリナ」

彼女は慈しむように、エリナの泥に汚れた頭を優しく撫でた。

その瞬間、エリナの幼い魂に消えない刻印が打たれた。

この人のようにになりたい。

この冷酷な地獄の中で、こんなにも美しく、誇り高く自らの足で歩ける部品になりたいのだと。

「……う、つぶ」

唐突に、エリナは現実に戻された。

口の中に広がっていたチョコレートの甘い幻覚は、食道を駆け上がってきた胃液の酸味へと一瞬で書き換えられていた。

「ハア、ハア……ッ！」

エリナは走りながら口元を強く押さえ、荒い息を吐き出した。

そうだ。

私は選ばれたのだ。

だから、守らなければならない。

あの日、絶望の底で誇りを教えてくれた人を。

視界の先、第4機関室の重厚な気密ハッチが眼前に迫る。

そのわずかな隙間からは、呼吸を阻害するほどに濃密な、熟れすぎて腐敗した果実のようなフェロモンの熱気が猛烈に吹き荒れていた。

EVAハーネス Mk.4(旧世代装甲型)



普及型Mk.5の前世代にあたる、一級修繕士専用の機動外骨格です。チタン複合装甲が四肢と急所を覆い、作業性を損なわずに微小デブリや加減速Gから装着者を防護します。

背部の大型放熱ブロックでエネルギー逆流を吸収・放熱する一方、即時給電と排熱パージのため、胸元と股間の生体ポートは大胆に切り欠かれた常時露出設計です。

優れた安全性を誇る傑作機でしたが、高コストと「装甲は感度搾取を阻害する」という企業の合理主義により、装甲を削ったMk.5や、装甲全廃・皮膚受容特化のMk.6へ更新され退役しました。

作品名: 星海の修繕士 III ～蜜の汚染と最後の爆弾～

発行日: 2026年9月13日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
